

「パレスチナは遠いか、近いか ―― 過ぎ行く季節の中で」

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前信州イスラーム世界勉強会代表)

{過ぎ行く季節の中で}

“不定期連載”を始める当初から十分に予想されたことであったが、この「カイロ通信」の原稿執筆をしばらくサボってしまった。その間に季節が行き過ぎた。

今年の日本の夏が酷暑だったことは連日のニュース報道で知らされた。カイロは最高気温がときどき 40 度前後となることはあったが、日本よりは過ごし易かったのではないと思う。8 月初め、数か月ぶりに調査のために戻ってきた大学院生が、こちらに戻り、涼しくてホッとしたと言っていた。

火炎樹の花は 6 月末にその盛りを過ぎた。日本の桜の花のように一斉に散ったりすることはないのだが、濃い緑の葉陰にわずかに残った花卉が、赤い花火のように儚げに残っている様子に、妻が名残を惜しんでいた。

燕が去ったのは、7 月半ばであった。日本野鳥の会の会員である姉によると、第 1 号で書いた『幸福な王子』の話と違って、ヨーロッパに飛んでくる燕は、セネガルなど西アフリカが

中心であるという。それではまだ居残っているエジプトの燕は、地中海を渡っていかないのか、と思った。でも、さすがに暑さが厳しくなった頃、急に姿が見えなくなった。暑いので餌の虫の数が減ったためかもしれない。しかし、どこに飛んでいったかは分からない。



【写真②：ワシントン椰子の木】



【写真①：涼む猫】

その代わりと言っては何だが、鳥が三羽、どんな家族関係にあるのか不明だが、ベランダ脇の椰子の木に何回か、羽根を休めに来る日が続いた。当地の在来の棗椰子とは異なるワシントン椰子（あるいは「ワシントン椰子モドキ」か）という品種らしい。街路樹にもよく植えられている。その白くて長い花房の香りに誘われ、鳥たちは遊びに来たのかもしれない。乾した洗濯物の上に“落とし物”があり、犯人と疑った。

小鳥は襲わないだろう、と前の号では書いたが、路上で死んでいる小鳥をつついては姿も見かけたので、本来の仕事は街中でも続いているらしい。椰子の花はやがて黒い実の房に変わり、鳥たちが来ることもなくなった。

夏の盛りも過ぎ、日本の彼岸の頃には、燕に代わって空を数十のトンボが飛び交うのを見かけるようになった。暑さも衰えて、餌となる虫の数が増えたからかもしれない。夜になると虫を探す小さなヤモリの姿を網戸の向こうに見かけるようになった。

秋と言えば虫の音である。9月初めには地虫（オケラ？）のジーという長い音が聞こえて寝苦しい思いをした。その後はコオロギに代わった。エジプトでは、コオロギのことを、農業ゴキブリ（田舎のゴキブリ？）と呼ぶことを思い出したりした。

{イスマイリーヤ・スエズ運河大学を訪ねて}

エジプトで夏の風物詩には、いろいろあるがマンゴーもその一つである。マンゴーのシーズンは7月から11月、エジプトには200種類もの品種があるという。8月のある日の朝、ビルの中庭に面した別のベランダにマンゴーの実が落ちているのを発見した。見上げると、ベランダの近くにマンゴーの高木が植えられており、手を伸ばせば採れそうである。

インドが原産のマンゴーが、エジプトで植えられるようになったのは、殖産興業の父、ムハンマド・アリーの統治期、1825年だそうである。このように栽培の歴史は200年を数えるが、生産が急速に拡大したのは、そんなに昔ではない。1970年代の門戸開放経済の消費ブームに乗っての増産ではないかと思う。とくに近年は輸出も伸びている。以前はナイル・デルタが主要な産地だったが、沙漠の新開拓地が新しい生産拠点となっているという。とくにスエズ運河の主要都市であるイスマイリーヤの近郊が、マンゴー栽培の一大中心地である。

そのイスマイリーヤ市を7月末に久しぶりに訪ねた。他の町と変わらぬ雑然とした街並みの中に、以前の整然とした街路のイメージを思い出すのが難しい。エジプトの中でこの町だけは交通信号が守られているという話を聞いた記憶もあるからだ。同市を訪問した理由は、前号で述べたマンスーラと同じく、市内にあるスエズ運河大学で、フェローシップの案内などの事業説明をするためである。ただ、そんな話だけでは面白くないので「スエズ運河と近代日本」というスライドを数枚用意し、紙芝居的なお話をした。そして、お土産に“お約束”の農学部附属農園で採れた数週類のマンゴーの箱詰めをいただいたの



【写真③：ベランダのマンゴー】

である。

話をしたのは、大学院生向けの国際セミナーだったが、開会式が始まる前の時間帯、学長や主賓の列にくっついて、留学生が作っている各国紹介のブースを巡回した。すると、イエメンやシリア、インドネシアなどと並んでパレスチナのブースがあった。パレスチナ料理の軽食が用意されていて、留学生の人たちと話す機会を得た。そのうち歯科を勉強している二人は、西岸のヘブロン出身の兄弟だということだったが、どういった経緯で学んでいるかまでは聞けなかった



【写真④：スエズ運河大学パレスチナ・ブース】

{パレスチナとの距離}

3月末に始まる今回のエジプト滞在で、パレスチナ問題の現状、とりわけガザにおけるジェノサイドから避難している人たちなどを調べ、さらには何かできることがあるか考えたい、と思っていた。

日本とパレスチナの距離は、およそ 9200km 以上。これに対し、このカイロからガザまでは陸路で行けば 366km の近さである。しかし、実際の政治的な距離は近いようで遠い。

本通信ですでに述べたように、この「無風の国」において、ガザの状況に対する人々の表立った意見の表明に接することは難しい。ただ、自動車にパレスチナの国旗や地図のステッカーが貼られているのを目にすることもある。それくらいの意思表示は許されている。また、イスラエルに対するボイコット運動（BDS）には若い世代を中心に静かに賛同する声が広まっているようだ。親の世代に対し、そんな商品を買ってはいけない、と諭す若者たちもいる。近くにある目抜き通りのスターバックス（BDS のボイコット対象）もいつの間にか、表の看板が目立たない色に塗り替えられたと思ったら、閉店になっていた。

対イスラエル・ボイコットと言えば、2000 年の第二次インティファダ（アルアクサー・インティファダ）に対するエジプト市民の連帯運動を思い出す。支援物資を全国から集めたトラックのキャラバン隊が、ガザとの境界のラファハまで走った。拙著『エジプト革命』（平凡社新書 2012 年）の中では、このときの運動が 10 年後の 2011 年革命を導く一つの起点になったと書いた。友人の F 氏は当時、この連帯運動の指導者の一人だった。革命後、社会民主党という政党を率いたが、一昨年 2023 年の大統領選挙で現職大統領の対立候補として立候補した。他の有力な候補が圧力を受け辞退に追い込まれる中での「体制内野党的」政治行動であった。エジプト出版協会会長となっている F 氏とは、8 月初めにアフリカの書籍産業に関する UNESCO セミナーで再会した。挨拶を交わしながら、一つの政治的季節が行き過ぎたのを感じた。

{停戦交渉とガザ解放をめぐる運動の波}

3月末に来てから9月まで半年間。振り返るとたいしたことは何もできなかった。その間、ガザをめぐる事態の進行には、いくつかの波があった。1月の停戦合意が破綻する中、停戦をめぐる関係国間の対立や交渉と、ガザ解放を目指す国際的な市民運動の二つの動きが重なる形で、6月、そして9月の二つの波のピークがあった。

以下では、ガザにおけるジェノサイドと、それに対する国際社会の動きという時間の流れの中で、筆者がこちらで見聞きしたことや人との出会いなどを、備忘録風に書いてみたい。

2025年1月17日にイスラエルとハマースの間で42日（6週間）の停戦で合意がなされた。前年の夏から続けられてきた交渉の結果である。停戦期間は三段階から構成され、各段階で人質とパレスチナ人の拘束者を交換する。最終段階（2月末）でイスラエルは封鎖を解除、ハマースは軍事力の再整備を行わない、という約束だった。第五回目の人質交換がなされた頃（2月7日）、カイロに会議で短期滞在していたので、釈放シーンをテレビで見る機会を得た。しらじらしい感じもする式典の後、解放された若いイスラエル人男性が、親し気な様子で別れの挨拶をする姿が印象的だった。

しかし、2月4日にはこの停戦プロセスを一切無視するような、トランプ米大統領によるガザ復興計画が発表された。ガザの住民を強制退去させ、その後を「リビエラ化」という不真面目極まりない計画だった。そして、この時期、イスラエルによる停戦違反は、2月12日までに265件に上り、パレスチナ側には118名の死者が出ていた。また、ハマース側にも引き渡す人質の手違いもあり、イスラエルによる拘束者の釈放も遅延されて人質交換は停滞。ついに3月18日にイスラエル軍が空爆を再開して、停戦プロセスは突如、破綻した。

筆者がエジプトに赴任したのは、3月27日。この戦闘再開の直後のことであつた。再開後のイスラエル軍の攻撃による死者は、3月18日から22日までの5日間で一気に634名に及んだ。以下に述べる死者の数は、ガザの保健省の発表であり、遺体を確認した「数少なくとも」という限定付きの数字である。英語版ウィキペディアの「ガザ戦争タイムライン」(https://en.wikipedia.org/wiki/Timeline_of_the_Gaza_war)にもとづく。

3月24日（61名死亡 [2023年10月以来の死者の合計が5万人を超えた：5万82名]）、25日（62名）、26日（39名）。

カイロに到着した27日は25名。翌28日（43名）、29日（25名）、30日（65名 [Al Jazeera 発表]）、31日（80名）であつた。

{4月}

4月に入る。1日（42名）、2日（24名）、3日（97名）、5日（60名）、4日（保健省の発表無）、6日（26名）、7日（57名）、8日（58名）であつた。

到着した翌週の 4 月 6 日から 8 日にかけて、マクロン仏大統領がエジプトを訪問した。エジプト大統領と二人で、カイロの地下鉄の車両内でぎこちなくプラスチック製の椅子に座っている写真がネットの新聞に載っていた（1987 年開業のエジプト最初の地下鉄へのフランスの協力を記念したものか）。ただしこのとき突如、地下鉄の駅が立ち入り禁止となり、何の予告もなく他の電車がしばらく止まってしまい、乗客から戸惑いと不満の声が上がった。要人が来たときの対応で、いつものことではあるが。

しばらくして分かったのは、仏大統領のエジプト訪問が、ヨルダン国王も加えた三カ国協議のためであり、6 月のパレスチナ国家承認に向けての国際会議の根回しとして行なわれた、ということだった。

4 月 9 日（死者の合計が 5 万 846 名）、10 日（41 名）、11 日（10 人を超える死者の報 [保健省の発表無]）、12 日（死者の合計 5 万 912 名に）、13 日（11 名）、14 日（38 名）、15 日（17 名）、16 日（25 名）、17 日（40 名）、18・19 日（2 日間で 92 名）、20 日（44）、21 日（39 名）、22 日（26 名）、23 日（39 名）、24 日（50 名）、25 日（84 名）、26 日（Al Jazeera によると 10 名）、27 日（51 名）、28 日（71 名 [合計 5 万 2314 名に]）、29 日（50 名）、30 日（35 名）であった。

こうした「ボディーカウント」とも呼ばれる犠牲者の数を記録しながら、「私たちは数字ではない **We are not numbers**」という言葉を出す。数字の背後には名前が、人生がある。たとえわずかな年月の人生であったとしても。パレスチナ人の父と日本人の母を持つラッパー、DANNY JIN さんの歌の歌詞、「綿菓子みたく軽い命の価値 繰り返される大惨事 また人が死に、また人が死ぬ」、「人が死ぬ」のリフレインが耳に響く。

{5 月}

5 月に入る。1 日（18 名）、2 日・3 日（二日で 70 名）、4 日（40 名）、5 日（32 名）、6 日（48 名）、7 日（38 名）、8 日（106 名）、9 日（27 名）、10 日（23 名）、11 日（19 名）、12 日（29 名）、13 日（46 名 [合計 5 万 2908 名]）、14 日（20 名）、15 日（143 名 9、16 日（100 名）、17 日（153 名）、18 日（67 名）、19 日（136 名）、20 日（87 名）、21 日（82 名）、22 日（107 名）、23 日（60 名）、24 日（79 名）、25 日（38 名）、26 日（38 名）、27 日（79 名）、28 日（28 名）、29 日（67 名）、30 日（72 名）、31 日（60 名）、であった。

こうした数字が続く中、パレスチナの外にいる世界の人たちは何をしていたのか、そして自分は、と問う。

妻がこちらに到着した 5 月 21 日、ガザの画家、ライエド・イーサさんの家族、奥さんのハナーンさんとお子さんたちに会う機会を得た。フランス人の画家仲間たちの歎願によりガザから救い出されたイーサさんは、すでにフランス足場を固めていた。カイロで離れて暮してきたハナーンさんたちが合流する前日のことだった。

私が大学を定年退職する直前、2019 年 2 月から 3 月にかけてガザの画家三人を招いて、絵画展を開催したことがあった。ギャラリー・トークでは徐京植先生（2023 年 12 月没）に

大変お世話になった（「パレスチナ・ガザの画家三人展—アーティスト・ブリッジ 2019」
<https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?id=WedFeb201410392019>）。妻はガザからラファ
ハ検問所を経てのエジプトへの通過についての段取り、三人の画家の京都大学などでの
展覧会・講演会、募金活動や広報に当時、大忙しだった。そして三人がガザに戻るのに
際して、通過地点であるエジプトでの滞在では、カイロに長く滞在されている中野夫妻と
元エジプト外務省のカドリーさんのお世話になった。その他、ここではお名前を書けない
が、日本の外務省や大使館の方々の協力を得て実現できた、奇跡的な日本への旅であった。

信州イスラーム勉強会では、これまで連続的にガザの問題を中心にさまざまな企画を
してきた。最近では昨年 2024 年の「戦争と闘う美術の力」に続いて「パレスチナの悲しみ
と日常～マンガと絵日記をとおして～」が 9 月 25～28 日に松本市で開催されたというので
参加された方も多いと思う。その中で、文字通り瓦礫の中で紅茶などを絵の具の代わりに
してスケッチ画を SNS で公開してきた三人の画家の一人、ソヘイル・サーレムさんの一連
の絵が印象に残る。ソヘイルさんは現在なおガザに留まっている。

{6 月}

6 月に入る。1 日（32 名）、2 日（51 名）、3 日（40 名）、4 日（95 名）、5 日（70 名）、
6・7 日（二日で 95 名）、8 日（108 名）、9 日（47 名）、10 日（援助物資を待っていた 36
名が殺害の報道〔保健省の発表無〕）、11 日（120 名）、12 日（29 名）、13・14 日（二日で
90 名）、15 日（65 名）、16 日（68 名）、17 日（61 名）、18 日（144 名）、19 日（69 名）、
20・21 日（二日で 202 名）、22 日（51 名）、23 日（39 名）、24 日（79 名）、25 日（74 名）、
26 日（2 名の報道〔保健省の発表無〕）、27 日（72 名）、28 日（81 名）、29 日（88 名）、
30 日（これまでの死者の合計 5 万 6531 名）

6 月 1 日にパレスチナ人の女性企業家ロザンさんの会社を訪問する機会を得た。彼女の
会社は、パレスチナに関する様々な表象をデザイン化して商品開発をするビジネスである。
日本でパレスチナの刺繍作品を通信販売している北村さんもパートナーだと聞いた。訪問
すると、ガザの社員二人とのオンライン会議も設定してくれていた。

飢餓状況寸前の食糧不足と物価高の中、彼らは仕事を続けている。困窮する生活につい
て話をいろいろかがったが、とくに注目したのは現金（シェケル）不足により、ほぼ
キャッシュレス経済に近い状況が生まれているということだ。地域内の決済のやり方やこ
んな厳しい状況の中、どのような工夫で国際送金が続けられるのかについても話を聞いた。
やせ細っている社員の一人（タイシールさん：24 歳）は、爆撃により背骨の一部に破片が
入っており体調がすぐれないという。何とか海外で、たとえば日本で治療ができないか、
と頼まれたが、現段階ではどうにも対応ができない（当時、ガザ北部に住んでいた彼は、
南部への移動を強制されているのではないかと気になる）。

6 月にはガザ解放を目指す国際的な市民運動の一つの波があった。スウェーデンの活動
家グレタ・トゥンベリさんも乗ったガザに支援物資を届ける「ガザ自由船団 Gaza Freedom

Flotilla」マドリー号は 10 日、国際海域でイスラエル海軍により拿捕された。拘束された運動への参加者たちは、そのままイスラエルに拉致された。グレタさんはすぐに送還されたが、多くは引き続き拘留され、拷問を受けた人もいたという。

この運動は、ガザへの世界行進 <https://marchtogaza.net/> という「グローバルマーチ」の一部であり、陸路でもガザを目指す人たちがいた。平和な市民の運動でラファハ・ゲートの閉鎖を破ってジェノサイドを止めようとしたスムード・キャラバン隊 Soumoud Convoy である。スムードとは「堅忍不拔」（板垣先生の訳語）の意味、パレスチナ人のレジリエンスという抵抗の力を示す言葉である。アルジェリアとチュニジアから出発したトラック部隊は、北アフリカのアラブの同胞の参加を集めて進んできたが、リビア中部で進行を押しとどめられた。内戦中の同国は、東西に分断されているが、エジプトの影響下にあるリビア東部の境界線で阻止されたのである。

ガザへの行進の到着予定日は 15 日であったが、11 日にはエジプト外務省が「ガザ地帯に接する境界地区への訪問についての制度的規則」という声明を発表した。パレスチナとの連帯・イスラエル非難という決まり文句を述べた後で、エジプトへの入国と国内移動については査証や許可が必要、と参加者に釘を刺した。この平和な行進はエジプト政府に事前に申請して許可を受けていたとの情報もあったが、実際には厳しい対応が取られた。カイロ空港に到着した多くの参加予定者が拘束され、強制送還された。この規制を潜り抜け、運河地帯までたどり着いた少数の人たちも暴力的に阻止されたと聞く。

日本からも参加予定者があるとの報道もあり、11 日に在エジプト・日本大使館領事部からは在留邦人向けの注意喚起のメールがあった。シナイ半島の「北シナイ県には危険情報レベル 3 が、南シナイ県も一部を除きレベル 3 が発出されており、どの目的であっても渡航は中止してください」との渡航中止勧告であった。

そして、デモ行進の出発予定日である 12 日の翌日、13 日にはイスラエル空軍がイランの核関連施設や軍関係への空爆を開始し、世界を震撼させた。市民レベルでの平和への動きは吹っ飛ばされた感じであった。同じく鼻白む思いをしたのは、国際社会のパレスチナ国家承認による二国家解決案を進めようとしていたフランスとアラブ諸国の政策担当者であったろう。空爆の始まった 13 日には、そのためにパリ・ピース・フォーラムが開かれたが、17 日に予定されたサウジ・フランス共同議長によるリヤドでの「ハイレベルの会議」は延期となった。

その頃、UNESCO カイロ事務所の日本人職員高橋さんに夫婦ともども誘われて、6 月の 15 日と 16 日の二日間、パレスチナ刺繍ワークショップに参加した。UNESCO とパレスチナ女性連合のエジプト支部との共催であり、会場はイスラーム地区旧市街の保全を行なう NPO によ



【写真⑤】：パレスチナ刺繍ワークショップ

て提供された。参加した若い女性たちは、エジプト生まれのガザの出身者に加えて最近のガザからの避難した人たちであった。妻はワークショップに参加して、刺繍作品を一品仕上げた。筆者は前号で紹介した翻訳中の個人史の舞台がちょうど近くなので街の地名や道路名を調べに歩いた。

このワークショップで個人的に収穫だったのは、UNESCO 職員 A さんとの議論を通じて日本によるガザの学生の留学支援計画について考える機会を得たことだった。その後、「ガザの教育破壊と復興支援に関する提言」を 7 月 8 日にまとめ、一部を英語とアラビア語に訳した。この問題は、また機会をあらためて報告することもあるかもしれない【**同提言と資料については、勉強会 sub-blog に掲載済**】。

28 日にはパレスチナ女性連合カイロ事務所で開かれた朝食会（パレスチナ風）に招かれた。翌 29 日には、エジプト出身の世界的チェリスト、ハサン・モウタズさん（カタル交響楽団）のミニ・コンサートを自宅で開催した。このパレスチナ・チャリティー・コンサート（ガザへの寄付を目的）には、前述のロザンさんと会社のスタッフ、刺繍ワークショップに参加したパレスチナ人女性を招待した。モウタズさんとは、2014 と 16 年、二回にわたってピアニスト末永匡さんと共に東日本大震災の被災地で復興支援コンサートを開催した縁がある。この巡回コンサートは、中野夫妻の多大な貢献によるもので、また妻の企画運営に加えて息子も運転手として手伝った。これと同様に、今回のホーム・コンサートは、妻にとってこちらでの初仕事であった。その後、7 月 13 日エジプト出身の著名なフラメンコ・ギタリスト、アリー・ハッターブさんの第二回チャリティー・コンサートを開催した。ここでもエジプト人、パレスチナ人、日本人ら数十名が集ってくれた。

{7 月}

7 月に入る。保健省による遺体確認も追いつかないような被害状況となった。1 日（116 名）、2 日（142 名）、3 日（118 名）、4 日（138 名）、5 日（70 名）、6 日（80 名）、7 日（105 名）、8 日（49 名）、9 日（40 名）、10 日（14 名）、11 日（10 名以上の報道 [保健省の発表無]）、12 日（31 名以上の報道 [保健省の発表無]）、13 日（139 名）、14 日（120 名）、15 日（93 名）、16 日（94 名）、17 日（94 名）、18・19 日（二日間で 98 名）、20 日（130 名）、21 日（134 名）、22 日（16 名の報道 [保健省の発表無]）、23 日（6 名）、24 日（79 名）、25 日（80 名）、26 日（死者の報道無 [保健省の発表も無]）、27 日（88 名）、28 日（100 名）、29 日（113 名）、30 日（104 名）、31 日（111 名）

7 月 8 日、NGO 活動に積極的に関わっているカドリーさんの案内により、中野さんご夫妻ともども パレスチナ人の子どもを励ますパーティー 「もっと素敵なものがあるよ」に参加した。主催は「シリアの未来」協会というエジプトに避難したシリア人難民の互助団

体だった。スーダン人も支援してきた実績があり、今回はガザから避難してきたパレスチナ人の子どもたちを招待したのだという。

同協会は、今回の催し物の会場となった学校と同様の立派な自前の学校が他に何校もあり、また三つの大きな病院が特別料金で診療もしてくれることで、自国の難民支援の体制がかなり整っているようだった。その資金は国際的な難民支援機関によるものだというが、今回の企画も、会場に駆けつけてきたアレキサンドリアの企業家の資金提供もあったということで、民間の支援もそれなりにあるようだった。受付のボランティアの男性は、小学校の頃に避難してきたが、今は大学で勉強をしていると語った。シリア内戦は2011年に始まったから、それだけの年月が過ぎているわけである。

18日にはデザイナー会社のロザンさんの紹介でナスル・シティにあるパレスチナ物産店を訪問して、パレスチナ関係のグッズを妻がいろいろ買い求めた。今度、一時帰国する際に土産に、そして日本のNGOで販売してもらうためだ（その後8月4日にはパレスチナ女性連合事務所を訪問し、同じ目的で刺繍作品を購入した）。ガザからここに脱出してた店主は、他のパレスチナ人と同様に滞在許可は持っておらず、就労資格はない。そのためエジプト当局からはお目こぼししてもらっている状態なので、写真などは撮れない。居合わせた他の客は、ヨーロッパのどこかの国に居住しているパレスチナ人のご婦人で土産物を物色していた。

27日にはUNESCOパレスチナ刺繍ワークショップ第3回が開かれ、前回と同じく高橋さんの紹介で参加した。講師は、アラーさんというガザから避難してきた若いパレスチナ人女性（後に妻が聞いたところによると家族は元々ヤーファール出身）であり、刺繍作品のマーケティングについてスライドを使って講義した後、グループ討論するという形式だった。彼女は、もともと建築家だったが、子どもたちの心理ケアをする専門家となった。しかし、イスラエル軍攻撃で六回、避難を繰り返した後、ようやくエジプトに脱出したという。今は同じくガザから避難してきた女性たちを組織し、自活のために刺繍を教え、デザインした作品のネット販売をしてきたのだという。

29日には、イスマイリーヤのスエズ運河大学を訪問し、パレスチナ人留学生とともに、在カイロ・パレスチナ大使館の大学生担当の書記官と会った。教育支援の提言を後に送り、ワッツアップにはいいね！の反応があったが、その後、音沙汰がなかった。パレスチナ女性連合エジプト支部の会長さんに聞くと、昔からの知り合いであった。彼らはナクバ以降の難民でエジプトの滞在許可を持つ立場にあり、このときはパレスチナ大使館はこう



〔写真⑥：パレスチナ人の子どもたちを励ます会〕

した安定した身分のパレスチナ人の居住者だけを邦人保護の対象としているのか、などと思った。

{8月}

8月に入る。1日(82名)、2日(98名)、3日(119名)、4日(94名)、5日(87名)、6日(138名)、7日(100名)、8日(72名)、9日(39名)、10日(61名)、11日(69名)、12日(100名)、13日(123名)、14日(54名)、15日(51名)、16日(70名)、17日(47名)、18日(60名)、19日(60名)、20日(58名)、21日(70名)、22日(71名)、23日(61名)、24日(64名)、25日(58名)、26日(75名)、27日(76名)、28日(71名)、29日(59名)、30日(66名)、31日(88名)

8月1日、エジプトを短期訪問中の、ガザの画家三人の一人ムハンマド・ハワジリさん一家とお会いました。中野さんご夫妻とカドリーさんとともにギーザ地区に持つ彼らの家に招かれたのである。ガザからエジプトに逃れたが、長期滞在ビザが取れないので、ハワジリさんはアラブ首長国連邦のシャルジャに移動した。同国は芸術の価値を認め、芸術家を大事にする方針があるらしく、滞在許可を得ることができたらしい。招待されたのは、ハワジリさんと同じく有名な画家である妻のディナ・マタルさんが前回のエジプトに滞在中に買い求めたアパートだが、彼女はそのため祖母の代から受け継いできた金の装飾具全部を売り払ったという。現在のエジプトの法律では、スーダン人でもシリア人でも、住居など一定の不動産を取得した外国人は長期滞在許可を得ることができるのだが、その規定はパレスチナ人のみ適用されない。

さて、7月から8月にかけては、上述の「ガザへの世界行進」(6月半ば)へのエジプトの冷たい対応への反発もあったろう、飢餓など深刻な人道状況の悪化に対して、ラファハのゲートを閉鎖している、として世界各地のエジプト大使館の前で一斉に抗議運動が展開した。エジプト政府は声明を発表して、自分たちがゲートを閉ざしているのが原因ではなく、イスラエル側が閉鎖しているのだと弁明した。と同時に、こうしたエジプト大使館への抗議運動のいくつかを組織しているのは、エジプトがテロ組織に指定しているイスラム同胞団だと非難した。テルアビブ大使館前でのデモは、同胞団に近いイスラエルの国内のイスラーム主義者によるもので、彼らは同国の警察に守られながらデモをしている、とした(<https://gate.ahram.org.eg/daily/news/205301/26/988759>)。また、ロンドンのエジプト大使館前での同胞団のデモに対しては、それを阻止しようとした愛国的な青年がイギリスの警察に逮捕され、大使館が抗議するということもあった。それに対する腹いせだったのか、分からないが、カイロのイギリス大使館の壁に設置されていた強固な防御壁が撤去されるということが起きた(<https://english.ahram.org.eg/News/552373.aspx>)。世界各地でのエジプト大使館デモは、過剰なほどの警護体制で美観を害していたナイル河畔の通りがすっきりするという副産物をもたらした。それほど「風」しか、この国では吹かない。

{9月}

9月に入る。1日(98名)、2日(76名)、3日(113名)、4日(84名)、5日(69名)、6日(68名)、7日(87名)、8日(67名)、9日(83名)、10日(41名)、11日(72名)、12日(38名)、13日(47名)、14日(68名)、15日(34名)、16日(58名)、17日(98名)、18日(79名)、19日(33名)、20日(34名)、21日(75名)、22日(61名)、23日(38名)、24日(37名)、25日(83名)、26日(47名)、27日(77名)、28日(79名)、29日(50名)、30日(42名〔これまでの死者の数の合計6万6097名〕)

9月8日にパレスチナ大使館を訪問する機会を得た。UNESCO 職員の高橋さんによる紹介である。ナイル川の西岸、ドッキ地区にあった大使館が、東岸からかなり沙漠の奥に入った新興住宅地「新カイロ地区」に移転し、同時に文化センターを併設した。その内部設備に支援ができないか、などという話であった。新大使館は広大な「新カイロ地区」のはずれで、大きな道路を挟んでカイロ・アメリカ大学の緑豊かな新キャンパスが臨める。ナージー文化参事官が親切に館内を案内してくださった。それぞれ立派な施設であった。とくに印象的であったのは、文化センターの図書室に置かれていた子どもたちの絵である。



[写真⑦：パレスチナ文化センター図書室にあった子どもたちの絵]

これはトラウマ治療のために専門の教員の指導の下で描かれた絵だということだったが、先生たち自身がイスラエル軍の攻撃によるトラウマを抱える中、大変な困難を抱えた授業であったという話を聞いた。前掲の「ガザの教育破壊と教育復興に関する提言」の「資料3」に掲載したが、今回の狙い撃ちともいえるガザの研究者・教育者の犠牲者の一人に、ファーデル・アブー・ヘイン教授(アル・アクサー大学)がいる。イスラエルの攻撃による子どもたちのトラウマ治療に長年携わってきたこの分野の第一人者といえる

研究者だった。関連サイト：

<https://www.middleeasteye.net/news/war-gaza-prominent-professor-al-aqsa-university-killed-israel>

この9月は国際市民運動と停戦交渉の大きな波が二回目のピークを迎えた。毎年恒例の国連総会の一般討論演説が23日から29日にかけて開催されるということで、イギリスなど4カ国がパレスチナ国家承認を表明したのは総会前の21日のことであった。それ以前の19日には、日本が岩谷外相は現段階では国家承認はしない、と記者会見で述べた。そして、総会演説最終日の29日に、トランプ大統領が突如、20項目のガザ停戦案を発表した。背景の一つとしては、ほかにも様々な思惑はあったろうが、フランスと連携して平和の道を模索してきたアラブ諸国を抱き込んで、彼得意の「ディール」を試みたということだろう。

その成否はともかく、すでに破綻していることが歴史的に証明されている「二国家解決

案」の幻想をさらに引き延ばし、問題の本質を隠蔽する内容であることには変わりがない。トランプ提案であれ、オスロ合意であれ、パレスチナ人の安全保障の肝心な部分にはまったく触れていないのであるから。とはいえ、どのような背景や動機があるにせよ、またまったく将来の安全な生活の保障がさされていないにしても、ジェノサイドの中止、緩和に一定の影響を持つのでは、と多くの人が期待しているのは確かである。

この動きと同時期、6月に続いてガザ解放を目指す「グローバル・スムード船団」が、ガザ自由船団の歴史上最大の規模で組織された (<https://globalsumudflotilla.org/>)。52カ国の人たちが乗船した「大船団」は、しかし途中でドローンの攻撃を受け、そして10月6日には拿捕されて、グレタさんを含む460名以上が拉致拘束され、例によって酷い扱いを受けた。一方、妻が得た情報によれば、イスラエル海軍による拿捕活動は、ガザの漁民に思わぬ恩恵をもたらしたという。イスラエルの船舶が船団阻止に廻ったおかげで、これまでの厳しい海上規制が緩み、久しぶりに沖に出ることができて、海辺で待つ人たちに豊漁の海の幸を届けることができた。船団の援助物資はほとんど届かなかったのではあるが（ただ、一隻だけ拿捕されずにガザの海岸にたどり着いた小さな船があったという報道がある）。

{日本とのつながり}

日本とパレスチナの距離は遠いか、近いか。8月30日には、筆者自身も関わってきた板橋区の平和教育の市民団体「ひろがれ！ピースミュージアム・いたばし」による公開学習会がオンラインで開かれた。「GAZAの現状に市民は何ができるか？」というリレートークであり、一定の意味を持つ企画であったと思う。スピーカーには、本信州イスラーム世界勉強会のセミナーでも話してくれた金城美幸さんや小田切拓さんなど気鋭の論客に加えて、本勉強会の運営委員の鶴飼哲さんもフランスから飛び入りで入ってくださった。

今や日本各地で、規模の違いこそあれ、ガザのジェノサイドに対し、パレスチナ人と連帯する行動が組織されている。残念ながらそれを全体として束ねるところまでは運動が至ってはいない。対イスラエル制裁、対パレスチナ支援の具体的な政策委立案を行なうことができる市民社会的な組織を作るにはどのような道が必要なのであろうか。考えたいと思う。

9月10日には、ガザにおける手話通訳・手話教育の第一人者であるエハープさんの講演会（カイロ学振懇話会）を人数限定の対面形式で開催した。彼は30年以上も、日本のNGO「パレスチナ子どものキャンペーン」が支援する、ガザの聴覚障害児のろう学校「アトファール・ナー（私たちの子どもたち）」で活動してきた。今回のジェノサイドでは自身、目の前で父親や親族を殺され、攻撃から9か月後にガザを家族と一緒に脱出した。エハープさんを紹介してくれたのは、パレスチナ人と障害の問題を研究している大学院生の西藤さんである（当時、クウェートで語学留学中）。講演のタイトルは、“Disability and War in Gaza: Realities, Challenges, and Paths of Intervention”であった。さすがにコミュニ

ケーションの達人である彼は、参加者をパレスチナ・アラビア語手話の世界に引き込んでいった。エハープさんが見せてくれたスライドで一番ショックであったのは、両手を失った少女である。手話ができなくなった彼女はこれからどのように他人と会話していくのだろう。しかし、その写真の一点の曇りもない明るい笑顔が何よりも救いだっただろう。

9月22日には、長野県の高校の世界史の授業にオンラインで参加した。本イスラーム世界勉強会の運営委員会のメンバーでもある小川幸司先生の授業であり、伊那弥生ヶ丘高校の2年生の鋭い質問に懸命に答えた。事前によく勉強されてきた高校生の皆さんとの議論は、自身の勉強にもなったし、今後の日本とパレスチナ人との距離を展望する上でも希望の光を見る思いがした。

カイロで暮らしているとテレビも見ないので意外に読書の時間がある。学振事務所および住居には歴代のセンター長が日本から持ってきた日本語の本がそれなりにある。残念ながら26年前に筆者自身が持ってきた本（『中央公論社 日本の歴史』シリーズ（文庫版）など）のかなりが誰かに持ち去られたであろう、今は見当たらない。現在は、図書室の蔵書として管理されており、利用者もしっかりした人たちがばかりなのでそんなことは起きなくなった。

また前置きが長くなったが、最後に言及したかったのは、再読した日本のパレスチナ問題に関する古典的な著作『アラブの解放』（ドキュメント現代史 13 平凡社 1974 年）についてである。編者の板垣雄三先生からは、本当はタイトルを「パレスチナの解放」にしたかったというお話を聞いたことがある。それが出来なかった経緯も当時の事情を反映している。

今回、読んでいてデジャブのような思いがしたのは、次の箇所である。

「ガザ地帯の飢餓はイスラエル政府によって故意にひきおこされたものである。・・・中略・・・飢えのために一きれのパンを求めてどんなこともやりかねない気が狂ったような子供たちが見られる。病院に子供を見舞ったアラブの母親が、自制きれずにその子供の食物を盗むという光景も珍しいことではない。もちろんガザのユダヤ人官吏たちはちがった解釈を下してこう断言する。アラブの母親には母性愛が欠けているのだと！」[第Ⅱ部 シオニズムの思想と行動：アミタイ・ベン・ヨナ「イスラエル社会と差別」（佐藤風見訳）182 頁]。

もちろん事態はこの 1967 年戦争後の時期に較べて数十倍も深刻である。しかし、問題の構造は変わらない。そして、この期間、私たちとパレスチナとの距離は、はたしてどのように変わったのだろう。1970 年代以来のパレスチナとの連帯運動の高まりを見ると、距離は各段と縮まったように見えるが、昨今の心根の狭い政治潮流の抬頭の報道に接すると、そうは簡単に言えないような気もするのである。